― 研究室探訪 ―

がんの痛みをもつ患者さんの看護ケアを研究。看護専門職としての姿勢を学生たちへ伝えていきたい。

医療学部看護学科
教授 山中 政子

がんの痛みをもつ患者さんに対する看護ケアの研究をしています。がんの痛みを緩和する治療の主軸は医療用麻薬（麻薬性鎮痛薬）です。痛みは末期がんのみならず初期のがんによっても発生する症状であり、通院しながら医療用麻薬を服用する患者さんは年々増加しています。しかし、医療用麻薬は通常のお薬に比べて管理上注意すべきことが多く、眠気や便秘などの副作用も頻発します。患者さんが自宅で痛みやお薬を管理できるようになるためには、看護師からの支援が必要です。そこで、基礎となる研究を積み重ねて「通院患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラム」を開発しました。現在はこのプログラムの有効性を評価する研究に取り組んでいるところです。

研究に取り組むなかで特に印象に残っているのは、がんの痛みをもつ患者さんに参加観察とインタビュー調査を行ったときのことです。記述データを分析すると、そこには、がんは完治しないと認識し死を覚悟しつつも、自分を律して前に向かって生きようと努力する患者さんたちの姿が表れていました。

それは、このプログラムを末期がんの患者さんに使用してもらったときのことでした。いつも夫と通院されているご高齢の患者さんに協力いただいたのですが、参加後はご自宅に戻って「私たちにもまだできることがあるのね。人の役に立てるってうれしいね」と久しぶりにご夫婦の会話が弾んだそうです。

看護師は、このように病を抱えながらも高い精神性を維持する人間に接する職業であり、どのような姿勢で患者さんの前に立ち、どのように看るのか、自分はどうあるべきかを常に自身に問い続けなければなりません。このような看護専門職としての姿勢を学生たちに伝えていきたいと思っています。

天理市周辺の名店とその逸品を紹介

THE 天理ゴハン

天理の新名物
本格派なのに新しい釜玉うどん。

天理本通り商店街に2023年にオープンした「たまちゃんUDON」は、釜玉うどんをメインとする本格手打ちうどん屋。奈良県産の食材を使用し、特に卵は店主が3年間かけて厳選した、黄身が濃く、白身の臭みが少ない究極の一品です。「生卵の独特の食感が苦手な方にも釜玉うどんをおいしく食べてもらいたい」という想いから、ふわふわのメレンゲを乗せた名物「たまちゃんUDON」が生まれました。定番人気の鶏天おろしうどんや変わり種のキーマカレー風、カルボナーラ風のうどんも提供し、老若男女から愛されるお店となっています。

たまちゃんUDON
[たまちゃんUDON]：￥500-（税込）
[鶏天おろしうどん]：￥750-（税込）
〒632-0015
奈良県天理市三島町428-3
近鉄天理線／天理駅 徒歩15分
OPEN：9：00～17：00
（15：00～麺が売り切れ次第終了）
定休日：毎月8日、水曜日

たまちゃんUDON インスタグラム
@tamachan_udon

はばたき HABATAKI Vol.54

―発行元 天理大学 ―編集 天理大学学長室広報 社会連携課 ―住所 〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 ―TEL 0743-63-9006 ―発行日 2024年2月 号数 54号（Total 254号）―

［ キャリア特集 ］

挑戦が、はじめの一歩。

・TENRI PIONEERS（P.3）
ローカルな場所で、世界をつなぐ。
在モルドバ日本国大使館での2年間。
国際協力支援員 吉田 美喜さん

・TENRI CHALLENGERS（P.6）
伝えられない想いを、伝える。
言葉を超える創作ダンスの魅力。
小山 結美佳さん 体育学部 体育学科 スポーツ文化コース4年生

― その他 特集 ―
・創作ダンス部 ドイツ公演レポート（P.8）
・TENRI TEACHERS（P.9）
・天理大学のキャリア教育（P.10）

TENRI UNIVERSITY

正解を選ぶのではなく、選んだ選択を、正解にする。

大学で何を学ぶべきか?
どんな仕事につくべきか?
進路やキャリアに迷ったとき、つい「正解」を探している。
そんな自分に気がついた経験は、誰にでもあるはずです。
でも本当に「正解」は、正しい答えは
どこかに存在しているのでしょうか?

天理大学では海外や地域社会のなかで
実践的に学べる多彩なプログラムを用意しています。
知識を蓄える学びから一歩踏み出し、
異文化のなかへ、知らない人の輪に飛び込んでいく
その時間から身につくのは、
社会や周りが求める正解を見つける力ではなく
自分が何をしたいのか
どんな風に誰の役に立ちたいか
自分だけの想いに沿った答えを
チャレンジを通じて導き出す力です。

選択肢があふれ、行き先を見極めることが難しい時代です。
だからこそ、「正解を選ぶのではなくて、選んだ選択を正解にする」。
学生たちがそう自信を持って人生を切り拓いていけるように
天理大学では、総合的なキャリア支援を行っています。

常識は、それぞれ違うということ。
それを自然に
抵抗なく受け入れられること——
その感覚を、私は大学と
在外公館派遣員時代に学びました。

ローカルな場所で、世界をつなぐ。在モルドバ日本国大使館での2年間。

国際協力支援員 吉田 美喜さん

2020年3月、国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカ研究コース卒業。一般社団法人　国際交流サービス協会(在モルドバ日本国大使館勤務)を経て、2023年7月より一般財団法人 日本国際協力センターにてプログラムチーフとして勤務。

宮城県から、世界の架け橋に。国際協力にかかわる業務に邁進中。

「自分はまだまだ未熟。だから“勉強と成長ができる場所”というのが転職活動の軸でした。語学力やこれまでの経験を活かせると感じ、国際協力というお仕事に魅力を感じて応募したのが現職です」。

謙虚にそう話す、吉田美喜さん。国際学部地域文化学科の2020年卒業生だ。吉田さんは現在、出身地である宮城県の日本国際協力センターで勤務している。どのようなお仕事に携わっているのだろうか。

「外務省が企画する『対日理解促進プログラム』に関連する業務全般に携わっています。このプログラムは、海外の高校生や大学生・大学院生、若手の社会人を日本に招聘し、日本文化を理解し、好きになってもらうことを目的として実施されています。東南アジア諸国から北米、欧州まで幅広いエリアからの受け入れを行っており、私はプログラムに係る各種手配や参加者への同行、運営を担当しています」。

さまざまな国際的バックグラウンドを持つ人とかかわり、来日のサポートをする——そうした現職での役割を果たすうえで、吉田さんにとって確かな力となった時間がある。それは、在モルドバ日本国大使館での在外公館派遣員としての勤務経験だ。

▲ 在モルドバ日本国大使館での勤務風景

在モルドバ日本国大使館での2年間。当時の学びが、現職で活きている。

在外公館派遣員は、日本政府の在外公館で外交業務を総合的にサポートする人材だ。語学などの選考に合格した後、世界各国の日本大使館、総領事館で原則2年間勤務する。吉田さんは2020年3月より2年間、旧ソ連地域であるモルドバの日本国大使館にて勤務した。

「私は大学時代、ヨーロッパ·アフリカ研究コースでロシア語を専攻し、ロシアのモスクワ言語大学での交換留学も経験しました。留学先では語学の壁にぶつかったこともありましたが、猛勉強の末にロシア語が大好きになって。モルドバの公用語はルーマニア語ですが、歴史的経緯からロシア語も喋れる人が多いため、大使館での勤務中は日常的にロシア語でやりとりをしていました。ちょうどコロナ禍の真っ最中で、大使館への来客が普段より少ない状況でしたが、その分庶務や裏方業務の基礎をしっかりと教わり吸収できたと思っています。また、国際的なマナーについて知ったことも、大きな経験となりました。国旗の立て方からお食事を出す順番まで、国際的なゲストをお迎えするうえでのマナーやプロトコルを一から学んだことは、現職で非常に役立っています」。

東北六県で行われる多様なプログラムの開催に合わせ、吉田さんは参加者に同行して各地を回る。プログラムのテーマはビジネスから防災まで多岐に渡るという。なかでも防災をテーマにしたプログラムは、中学生の頃に東日本大震災で被災した吉田さんにとって人ごとではない。

「フィリピンやインドネシアなどを中心に、水害や台風の被害を受けやすい国には震災からの復興に関心を持つ方が多くいらっしゃいます。被災地に赴くこともあり、私自身にとっても改めて勉強する機会となっています。防災も含め、未来を担う青少年が普段とは違った視点を獲得し、母国で活躍する一助になればと思っています」。

異なる「当たり前」を、受け入れる。戦争被災者を支えられる人をめざして。

宮城県という、ある意味とても“ローカル”な場所で、グローバルな仕事に励む吉田さん。異文化理解というキーワードを、彼女はこんな風に言い換える。

「異文化理解って、『当たり前は一人ひとり違う』っていう感覚を『さっ』と持てることじゃないかなと私は思っているんです。大切なものは皆違う、常識はそれぞれ違うんだっていうこと——それを嫌な気持ちになったり重く捉えたりせず、ただ自然に抵抗なく受け入れられること。そういった感覚を、私は大学時代に経験した国際参加プロジェクト※や留学、そして恩師の先生たちから教えてもらいました。どのような職業であっても、仕事は必ず誰かの役に立つもの。人とのつながりを大事にしながら、これまでの国際的な経験を活かし、架け橋としての役割に励みたいと思っています」。

そんな吉田さんには、夢がある。

「モルドバは、ウクライナの隣国です。在外公館派遣員として勤務していた頃は、実際にウクライナから避難されてきた難民の方とロシア語でお話する機会がありました。大変な想いをされている方を目の当たりにしたことで、いつか戦争の被害にあった方の支援にかかわりたいと考えています。今はまだ何もできませんが、勉強して力を蓄えて自分にできるサポートから始められたらと思っています」。

留学や海外での就職に、転職。人生の岐路に立つとき、何を一番大切にしていますか？——そう尋ねると、彼女は朗らかにこう答えてくれた。

「後悔しないことです。正解を選ぶのではなくて、自分が選んだ選択が正解になるように、やりたいと思ったことには勇気を持って踏み出すように心がけています。学生の皆さんも、将来のことで悩んだり、人間関係でいろいろなことが起こったり、楽しいことばかりではないときもあるかもしれません。でも、今経験していることは、どんなことでも全てが将来につながっていくはずです。自分の人生を大切に、天理大学からのサポートを存分に活用してさまざまなことにチャレンジしてみてください」。

※「建学の精神」に基づく「他者への献身」を、国際的な舞台で実践していく本学独自の海外ボランティアプログラム。

ひとを想い、行動できる情熱を。

「外交官養成プロジェクト」

外交官養成セミナーは、語学教育における本学の伝統を活かしたプロジェクトです。

これまで在外公館派遣員を多数輩出してきた本学の実績を活かしながら、語学や国際情勢に関する学習、現役外交官との交流などを通じ、難関の外交官専門職試験を突破し国際社会に貢献する人材をめざします。開始から5年を迎えた2023年には、受講生だった鴻野直人さん（英米語専攻2023年3月卒業）が外務省専門職員採用試験に合格。鴻野さんは、4月から外務省専門職員として勤務します。

※文中の学部学科等名称は、2024年2月時点のものです。

伝えられない想いを、伝える。言葉を超える創作ダンスの魅力。

[創作ダンス部主将]（2023年度）
小山 結美佳さん
体育学部 体育学科 4年生

キラキラした世界に惹かれた。学科で広げたダンスへの多角的視点。

「ダンスの魅力は、言葉で言い表せない感情を表現できること。ダンスを通じて人とつながり合えるのも面白いと感じます」。

そう話すのは、創作ダンス部主将（2023年度）の小山結美佳さん。体育学部体育学科の4年生である小山さんが、ダンスに出会ったのは中学生の頃だ。もともと身体を動かすのが好きで、父親が運営する体操スクールに通っていたという彼女は、中学1年生の時にダンス部を見学。キラキラした衣装や雰囲気に惹かれて入部して以来、中学から大学までずっとダンスを続けてきた。

「私の出身校である帝塚山学院中学・高校には、天理大学出身の恩師が何人かいたこともあって、天理大学や創作ダンス部の話をよく聞いていました。大学に入学してからは、創作ダンス部の活動に励みながら、学科の授業にも熱心に取り組みました。学科には創作ダンス部顧問の塚本順子先生が担当する『身体コミュニケーション』や稲葉慎太郎先生の『スポーツマネジメント』など、コミュニケーションとしてのダンスを考えたり、スポーツ経営の裏側と成り立ちを学んだりするさまざまな授業があり、非常に勉強になりました」。

ダンスで得た“つながり”で、成長できたことがうれしいです。

周囲から驚かれる成長ぶり。顧問のさりげない助言が糧に。

自分の意見をしっかりと述べる小山さんの姿からは、芯のあるリーダーシップや柔らかな周囲への気遣いが伝わってくる。もともと人の上に立つことが得意だったのだろうか？そう尋ねると、彼女は笑って首を振る。

「私は結構口下手なんです。高校時代は自分から発言することが苦手だったし、恥ずかしいから練習の声出しもあまり堂々とできなかった。転機になったのは、天理大学創作ダンス部への入部でした。同期に優しい子が多いから自分が引っ張らなければいけないかも、と考えるようになって、率先した行動を心がけるようになりました。家族や高校時代の恩師からも『成長したね』と驚かれることも多く、自分で変わろうと思って変われたことがうれしいです」。

成長の場となった創作ダンス部は、1969年に創作舞踊同好会として発足し、50年以上もの歴史のなかで、全国大会やコンクール、単独公演などの舞台に向けて、個性豊かな作品づくりや練習に励んできた。作品への評価も高く、“ダンスの甲子園”とも呼ばれる『全日本高校・大学ダンスフェスティバル』にて、2023年は2度目の受賞となる実質2位相当の『NHK賞』を受賞。その作品を主となって創作したのは、小山さんではなく副キャプテンだった。

「もっと作品づくりにもかかわれば良かったのかなと思うこともあります。でも、私自身はリーダーシップを取ることに集中し、副キャプテンを支える役割を担えて良かったなと今は思っています。私たちの主体性を信じながら、そっと助言してくれる顧問の塚本先生にもとても感謝しています」。

集大成となったドイツ公演。海外経験で気づいた大事なこと。

そんな小山さんにとって、4年間の集大成となったのが2024年2月に行われた創作ダンス部のドイツ公演だ。顧問の塚本順子教授が2012年にドイツで研究活動を行っていた際にできたご縁で、今回の海外公演が実現した。

「マールブルクのギムナジウム（※欧州の中等教育機関）で公演できることになり、本格的な円形舞台で、また海外で踊る経験は初めてなので、出発前からとても楽しみにしていました」。

そして迎えた、本番。2月12日の当日は、朝からリハーサルを実施し、舞台の大きさや造りに合わせた調整を入念に行い挑んだ。8つの演目を踊りきると、客席に集まった150人を超えるギムナジウムの生徒や先生たちから、大きな歓声と拍手を浴びた。

「日本人とは違った反応なども感じられて、学びの深い時間となりました。今まで仲間とともに4年間励んできたことが実を結んだようで、素直にとてもうれしいです」。

小山さんは大学卒業後、天理大学大学院体育学研究科体育学専攻（修士課程）に進学する。今後の目標について尋ねると、彼女はこう話す。

「大学の卒業研究では、ダンスの経験者と未経験者の視線分析に関する事例研究に取り組みました。大学院ではさらに振りの習得スピードにおける視線行動の違いを検証し、指導法に役立つ研究がしたいと思っています。ダンスにはもちろんソロの舞踊もあるけれど、群舞のなかで周囲のことを考え、合わせることが非常に大事になります。将来は父が経営するスポーツスクールを引き継ぎたいと思っていますので、スポーツやダンスを通じて、子どもたちに相手を思いやることの大切さを伝えていくことが目標です。努力すること、感謝することを忘れずに、置かれた環境で努力を続けたいと思います」。

※文中の学部学科等名称は、2024年2月時点のものです。

SPECIAL EVENT REPORT

創作ダンス部 マールブルク公演

表現が国境を超える、その瞬間を。

創作ダンス部 海外初公演ルポ

2024年2月12日、天理大学の創作ダンス部はドイツ・マールブルクでの特別公演を実施しました。海外での初パフォーマンスやダンスを通じた国際交流で、学生たちは何を学んだのでしょうか？現地の様子をレポートします。

円形舞台で調整を急げ！

石畳の古い街並みが続く、ドイツ・マールブルク。ドイツにおける最古のプロテスタント系大学であるマールブルク大学と天理大学は、これまで半世紀以上にわたる交流を重ねてきました。こうした歴史のもとで、創作ダンス部史上初となる海外特別公演が実現しました。出演する部員13名は8つの演目を準備し、フランクフルト経由でマールブルクに到着。公演当日の朝はギムナジウムの円形舞台で入念なリハーサルを実施しました。舞台のサイズや構造に合わせて、動きや振りなどを細かに調整する必要があるためです。ドイツ人の音響スタッフと、身振り手振りを交えたコミュニケーションでBGMの打ち合わせを行ったりと、積もる緊張感のなか開始時間は刻々と迫っていきます。

いざ本番！大歓声に包まれて

奈良をテーマにした「あおによし」や、豊かさの象徴である水から環境問題を考える「Water Vein -ひと雫のその先に-」など、部員自らが英語での解説を行いながら、各演目を実施。時に深遠なテーマで、時にはアクロバティックに、また時には笑いを交えてコミカルに——そんな緩急のある演舞に客席からは歓声が上がります。観客のほとんどはギムナジウムに通う学生。年齢層は10歳から19歳とさまざまでしたが、全員が真剣な眼差しで舞台を見つめていたのが印象的で、全演目の終了後には大きな拍手が会場に響きました。

ダンスを通じた学生との交流も

翌13日には、マールブルク大学教育学部にてダンスを指導されていたホイジンガ元教授による特別ミニ・セッションが開催され、激励の言葉がダンス部員におくられました。また同日「国際スポーツ交流実習」に参加していた学生を交え、ダンスを通じた交流も実施。「皆で踊ろう、ドラえもん」というタイトルからは想像できないキレの良いダンスを、日独混合のグループがそれぞれに練習。最後に全員で踊る頃には、グループ内の距離感も縮まったようです。国籍や言語といった違いを超える力がダンスにはあることを感じる2日間となりました。

TEACHER'S VOICE 体育学部 体育学科 塚本 順子 教授

ダンスには、言葉を超えて感情や想いを伝える力があります。部活動を通じ、毎年部員一人ひとりの成長を感じています。コミュニケーションが成立する幸せな瞬間を経験することが、学生たちの新しい気づきにつながることを願っています。

協働して感謝や感動を与える。

スポーツが持つ、今世界に必要な「力」。

TENRI TEACHERS

プロサッカー指導者 高祖 和弘さん

1981年3月、体育学部体育学科卒業。松下電器産業サッカー部選手兼任コーチ、ガンバ大阪GKコーチ、サガン鳥栖監督、清水エスパルス強化部門スタッフ、履正社FC、ベイユヴェール西宮女子サッカーチーム監督などを経て、2024年4月より天理大学体育学部非常勤講師・サッカー部監督。公認S級コーチ、指導者養成チューター、JFLマッチコミッショナー、日本サッカー協会100周年功労賞受賞。

JFA公認C級コーチライセンス取得に向けた授業を開講

「生涯教育実習1・2」では、アマチュアレベルの選手を指導できる人材を養成すると同時に、指導者としての基礎を築こうとする指導者養成を目的とします。終了後にはJFA公認C級コーチライセンスが交付されます。

体育教員の夢からプロサッカーコーチへ。体育学部での学びが人格形成の源泉だった。

「サッカーに限らず、目標を持ち達成するためには、さまざまな課題や困難を乗り越えなければなりません。そこには物事の全体に対し、細かい部分や細部（ディテール）をとらえ実行することが大切だと伝えています。サッカーは子供を大人にし、大人を紳士、淑女にするスポーツなんですよ」。

熱い眼差しでそう語るのは、高祖和弘さん（体育学部体育学科 1981年3月卒業）。小学生の頃から、サッカー一筋の人生を歩んできた。松下電器産業サッカー部、ガンバ大阪の選手・コーチやサガン鳥栖の監督などを経て、2023年6月からは天理大学サッカー部監督に就任し、C級ライセンス取得をめざす授業においても講師を務める。

「天理大学への進学は体育教員の夢があったからです。大学卒業後はガンバ大阪の前身である松下電器産業へ入社し、社員として、競技者・コーチとして経験を積むなかで、Jリーグ誕生がきっかけでプロサッカーコーチとしてのキャリアがスタートしました。

サッカーを通じて、人々に夢や感動そして喜びを与え、選手を育成・指導するために、今でも学ぶことを忘れず進化できているのは、指導者として根底にある人格・人間性を天理大学の４年間で培ったことにあります。本当に恵まれていたと感謝しています」。

スポーツマンシップには、今の時代に必要なものが詰まっている。

高祖さんは指導者として常に心に刻んでいることがある。それは、“忍耐”、“進化”、“ワールドスタンダード”だ。

「スポーツには、競技を通じて人間を成長させる力があります。土を耕し、種を蒔き、花が咲き、実をつけるまでには時間がかかります。指導者にはどんな選手とも平等に向き合いながら、成長を支えていく“忍”の一字が必要です。またグローバル化や多様化の進む社会において、指導者自ら進化し、世界基準に適合した練習や指導方法に落とし込む必要があります。

単なる競技者の育成に留まらず、どのような形でも社会に貢献し、世界でも活躍できる、スポーツマンシップやフェアな精神を具えた学生を育てたいと思っています。

自己中心的な考え方が多い今だからこそ、相手を尊重し、敬意を持ちたたえ合い、感謝や感動を与えるスポーツは、きっと大きな力を発揮すると信じています」。

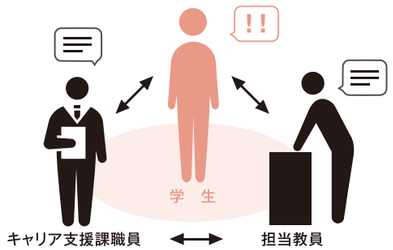
※文中の学部学科等名称は、2024年2月時点のものです。

組織や人に貢献する人材を育成する
天理大学のキャリア教育

天理大学では、率先して周囲のために行動できる「貢献性」の育成を重視しています。学生の「人間力」を磨き、主体的な進路選びをサポートするキャリア支援の特徴を紹介します。

教職一体で推進する、1対1のキャリア支援

キャリア支援課職員と担当教員との細やかな連携により、少人数制のもとで学生全員と1対1で向き合い、それぞれの目標達成を支えています。重視するのは、学生の個性や意志をどう活かせるかという視点と対話です。何がしたいか、そして周囲のために何ができるのかを考え、行動していくのは学生自身です。お仕着せ型の視線ではなく、学生が主体的に進路を選び、人生を切り拓くことを主眼に置いています。



天理大学生の強み

5学部で展開する専門性と豊かな教養を育む教育は、社会が要請する即戦力の育成につながっています。また、多くの企業から本学卒業生への評価として「人や周囲のことを考えて行動できる」「率先して動き、取り組む姿勢がある」との声が寄せられています。かかわる人すべてを大切にする誠意と、自分も周囲も笑顔にする力が、天理大学生の強さの源泉です。

“強み”を導く要素

貢献性と行動力を養う、多彩なプロジェクト

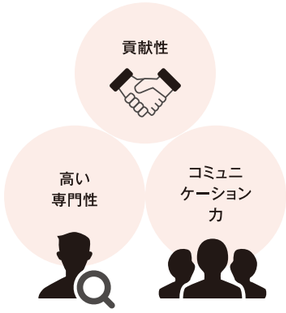
海外や地域での貢献活動、地域企業との商品開発…多彩な活動で実践力を養う。

国際感覚を高める、留学・海外研修

留学・海外研修・海外インターンシップで、交友関係や視野が広がる。

スポーツに打ち込む経験が人間性を磨く

全力でスポーツに打ち込む経験が、協調性や人間性を磨く。



教員・公務員をめざす学生サポートも充実

教員・公務員をめざす学生へのサポートも充実。教員採用試験、公務員採用試験の受験期を迎える前に、学内で各模擬試験を実施しています。「教員採用試験対策講座」では教職教養・面接・集団討論対策を通じて教員採用試験合格をバックアップ。「公務員教養試験対策講座」では、公務員一次試験対策をはじめ面接や論文対策などをトータルで支援します。

- 学内模擬試験
- 教員採用試験対策講座
- 公務員教養試験対策講座

Companies' Voice

企業からの“声”。

天理大学生を採用した企業から、毎年好意的な評価が寄せられています。

“高いコミュニケーション力”

ビジネスマナーなど社会人としての基礎的素地に加え、協調性や適応能力が高く、努力を惜しまない姿勢が共通している。主体的に行動できる卒業生が多く、向上心が評価できる。
[解説]　本学では仕事への基本的姿勢やマナーの大切さを伝えながら、学生の持ち味を社会で最大限に活かす道をともに探っています。こうしたキャリア教育に加え、ボランティアや部活動で培われたコミュニケーション力が、多くの職場に貢献していると考えられます。

“国際性と外国語力が、魅力”

多様な国籍の社員が働く当社では、異文化を理解できる天理大学の卒業生を重宝している。語学力に留まらず、仲間を想いやり周囲に貢献できる人間性が魅力だと感じている。
[解説] 本学は留学・海外研修制度の充実に定評があります。海外で国際感覚を磨くなかで身につけた「他者への献身」という視点が、豊かな人間性へとつながっています。各語学検定のサポートにも力を入れており、外国語力に長けた出身者が多いのも特徴です。

“フェアな精神と組織を支える力”

人と積極的にかかわり、周囲を盛り上げようとする明るさや、誰とでも対等に接しようとするフェアな姿勢を感じる。
[解説]　「他者への献身」を建学の精神に掲げる本学では、他者を想い、サポートするボランティアや課外活動の機会が充実。知識を活かし、周囲に貢献する方法を考える姿勢を育成しています。ゼミ形式の授業や部活動で培った周囲と連携する力も強みです。

“失敗を恐れず、挑戦する姿勢”

スポーツ経験者が多いからか、ストレス耐性が高く、粘り強く頑張る卒業生が多い。礼儀正しく、マナーが良い点も素晴らしい。
[解説] 本学には部活動に所属し文武両道で頑張る学生が多く在籍しています。上下関係を学び全力で競技に打ち込んだ時間が協調性と人間性を磨きます。また、キャリア支援課では「身体で覚える就活のポイント」として社会人の基礎となる礼儀作法の大切さを伝えています。

就職実績

※2023年3月卒業生実績
※医療学部は2023年4月から新設のため除く

全学就職実績 97.2%

人間学部 98.8%

●主な就職先
セーレン、小林クリエイト、天理時報社、米田薬品工業、後藤回漕店、日本BCP、タカラ通商、日本トーター、イオンビッグ、コスモス薬品、キタムラ、日本郵政、東京海上日動コミュニケーションズ、ヤマシタ、天理よろづ相談所病院、小豆島中央病院企業団、吉田病院、高井病院、正和会、協同福祉会、ブレイブ、大和高田市役所

文学部 91.1%

●主な就職先
関西不動産販売、清弘エンジニアリング、丸井織物、枡忠銘木店、安積濾紙、松江山本金属、Buy Sell Technologies、関西丸和ロジスティクス、奈良日野自動車、梅守本店、東急リゾーツ&ステイ、奈良県 教員(社会)、さなる、奈良県農業協同組合、イセット、トランスコスモス、防衛省自衛隊、上越市役所、奈良市役所、美咲町職員

国際学部 96.0%

●主な就職先
熊谷組、一条工務店、神戸製鋼所、豊田自動織機、セールスフォース・ジャパン、近畿日本鉄道、オーナミ、大阪めいらく、ヤナセ、上新電機、静岡銀行、大阪シティ信用金庫、きのくに信用金庫、明和地所、オリックス自動車、船井総合研究所、ワールド・ヘリテイジ、ノバレーゼ、ECC、綜合警備保障、国際交流サービス協会、防衛省自衛隊、香美町役場、大阪府警察本部、奈良県警察本部

体育学部 100%

●主な就職先
ドリームベッド、旭化成、共和、住友電気工業、リコー、三浦工業、マツダ、四国旅客鉄道、日本通運、リコージャパン、モンベル、ライフコーポレーション、徳島銀行、エスリード、メディロム、Plan・Do・See、奈良県 教員(保体)、日本郵便、セコム、国際協力機構、堺市消防局、東京消防庁、大阪府警察本部、警視庁